

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：13801

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13225

研究課題名(和文) キャリア発達の視点を備え、地域社会と連携し得る道德教育のアプローチと教材の開発

研究課題名(英文) Development of teaching materials and approach of moral education collaborating with local community and taking a perspective on career development

研究代表者

中村 美智太郎 (Nakamura, Michitaro)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：20725189

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、子どもの「生きる力」の育成という観点から道德教育とキャリア教育の一体化の可能性を追求することにあつた。本研究では道德教育において中核となる諸理念についての検討と、道德教育とキャリア教育の実践・調査を通じて、キャリア教育の視点から実施される道德教育という理念を彫琢し、教材を作成した。キャリア発達を備えた道德教育では、家庭や地域社会との連携を図りながら、教師と児童・生徒及び児童・生徒同士の間関係を深めることができる。このアプローチと教材によって、互いに連携しながら学校運営と道德教育を行える教員と地域住民の「高度化」に貢献することが期待される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to pursue the possibility of integration of moral education and career education from the viewpoint of fostering children's "zest for life". Teaching materials were created through examination of the core principles in moral education and through practice and survey of moral education and career education. Moral education with career development can deepen the human relationship between teachers and children and amongst children themselves in cooperation with children's homes and the local community. This approach and teaching materials are expected to contribute to the "advancement" of teachers and community residents who can conduct school administration and moral education in cooperation with each other.

研究分野：道德教育・倫理学

キーワード：道德教育 キャリア教育 キャリア発達 道德概念 地域との連携 高度化

1. 研究開始当初の背景

平成 25 年度以降の新学習指導要領の全面実施を迎えて「生きる力」を育むという理念に基づいて「思考力」「判断力」「表現力」の育成が重視されることが国家施策となった。これにより学校だけではなく、家庭や地域といった社会全体で子どもの教育に取り組む必要性が一層高まっている。この流れと共に道徳の教科化が「特別の時間・道徳」(仮称)として具体的に構想されるに至り、理論においても実践においても道徳教育の活性化が急務となっている。現在この課題への応答が強く求められている。道徳教育とキャリア教育もまた、全学校的な一体的な取り組みの必要がある分野と位置づけることができ、研究代表者は道徳教育とキャリア教育の接合の問題としてすでに研究成果を刊行している(中村美智太郎「キャリア教育と道徳教育はどう違う?」, 山崎保寿編著『キャリア教育の基礎・基本』所収, 学事出版, 2013 年)。本研究はこの枠組みの上に「キャリア発達」という観点から道徳教育のオルタナティブなアプローチを模索するものである。

2. 研究の目的

本研究では、いわゆる「道徳の教科化」を見越しながら、道徳教育とキャリア教育の国際的な視点からの調査研究をベースにして、(1)キャリア発達の視点を備え、かつ地域社会と連携し得る道徳教育の実現へのアプローチを開発することを目的とする。その具体的な成果物として、実践を交えながら、児童・生徒の道徳的涵養を児童・生徒のキャリア教育の側面から進め、かつ教員自身と学校全体の質の「高度化」を実現する、(2)キャリア教育と道徳教育とを接合する教材を開発する。アプローチと教材双方の開発により、教員研修と児童・生徒指導の両面から、教員・学校・地域社会の連携に基づいた包括的な教育の実現可能性を高め、児童・生徒が主体的に自らの将来への視野を拡げて充実した豊かな生を営み続けることに寄与する。

3. 研究の方法

(1)すでに静岡大学教育学部・教育学研究科が構築している学校との連携関係を活用し、道徳教育とキャリア教育の事例を調査する。平行して海外、特にドイツにおける教育を先進事例研究として調査し、学校現場の抱える現代的な課題を国際的な視角から明らかにする。

(2)(1)の成果に基づき、子どもの実態に即したよりリアルな内容を持つ、キャリア発達の視点を備えた道徳教育の教材草案と試行版を作成し、教育現場との往還に基づいて改善を繰り返す。

(3)(2)の成果に基づき、キャリア発達の側

面からキャリア教育を道徳教育と接合する研究成果を出す。国内外での研究会等で学問的な評価を受け、教材を完成させて刊行する。

4. 研究成果

本研究の成果は、道徳教育にキャリア教育のフレームを導入し、地域社会や大学といった外部人材との関わりの中で道徳教育とキャリア教育の一体化の可能性を追求すること、また教員研修用と児童・生徒指導用を兼ね、地域社会と連携し得る道徳教育の実現に資する教材を開発することの二点にある。この二点をベースに置きつつ、具体的には、道徳的価値の再構築(特に「自由」「自律」「家族愛」等)と、現代的課題に対応する教授内容及び方法論の援用(特に「キャリア教育」「ライフスキル教育」「情報モラル教育」「ICT活用指導力」等)、さらに調査研究に基づく教員養成・研修の可能性追求(特に「教員養成系大学生の道徳意識調査」「学校と地域の連携推進」等)の三点の成果を上げた。

本研究においてキャリア教育とは、職業・進路の指導・相談を背景としつつ、「人生行路・足跡」といったより広い視野から子どもの将来への展望を含めていく営みであると規定して、これを、本研究開始時において教科化を目前にしていた道徳教育と接合することを試みた。

キャリア教育そのものの必要性については、ハル(Hall, D.T. "Careers in Organizations", 1976)によって指摘されて以降、日本でも文部科学省『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』(文部科学省, 2004)をはじめとして、必要性への認識が高まってきている。また、学校における実践も積み重ねられてきている。他方で、本研究で実施した国内外での調査によれば、学校でのキャリア教育は、児童・生徒に対する短期的な進路指導に力点が置かれ、社会状況の変化に対応しながら「人生行路・足跡」の視点から自らの生を主体的に長期的に推進していくものであるという視点が背景に退きがちであるという課題が浮かび上がってきた。

また道徳教育においては、2015 年 3 月に新しい学習指導要領が告示され、小学校では 2018 年度から、中学校では 2019 年度から検定教科書を使用した「特別の教科 道徳」の授業が実施される。このいわゆる「道徳の教科化」に伴い、改定された学習指導要領では最大の特徴である「考え、議論する道徳」への転換を図る必要に迫られる。このため、道徳教育の目標と道徳科の目標の関係性を明確にし、児童生徒の発達段階をふまえた体系的な指導計画や多様で効果的な指導方法への改善などが求められ、あわせて、従来の道徳教育のあり方に対する反省があり、学習指導要領解説等にも示される通り、これまでの道徳教育では道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行われ「確固たる成果

を上げている学校がある」ものの、いくつかの課題も指摘されてきた。それは、「歴史的経緯に影響され、道徳教育そのものを忌避しがちな風潮があること」「他教科に比べて軽んじられていること」「読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われる例があること」の三点に整理することができる。

本研究での文献研究並びに調査研究、問題の整理を通じて、このように、これまでのキャリア教育と道徳教育にはそれぞれ現代的な課題が含まれており、その解決に向けた応答が期待されていることが明確となった。これに対して、これまでのキャリア教育研究の成果から「個々人が生涯にわたって遂行する自己と働くこととの関係付け・価値付けの累積」がキャリア教育の本質であることが明らかとなったことに着目し、これは道徳教育の営みと本質的に重なるものであるとの立場を採用し、さらに「知」の拠点としての地域と大学がこの理論的な立場と実践に関わることで、道徳教育及びキャリア教育双方の課題に応答することができるというアプローチに至った。また、学校全体での一体的な取り組みという制度的・組織的な視点からも、道徳教育とキャリア教育とはそれぞれの理念において一体化の可能性が示されている。本研究はこの理念における一致にも着目し、ドイツにおける教育動向及び道徳の理念を構成する概念を調査しながら、キャリア発達の視点を採用した道徳教育におけるオルタナティブな教材及びアプローチの開発を実現した。

また、本研究ではこの教材とアプローチの開発によって、キャリア発達の視点を備えた道徳教育における「評価」の視点を獲得した。「道徳の教科化」の流れにおいて、子どもへの「価値の教授」を目指す従来のアプローチだけでは、子どもの持つ道徳的価値を「評価」することで、権威主義的な姿勢を促進し、また自尊感情を損なうといった危険性が見込まれる。この危険性については、T・W・アドルノが「権威主義的パーソナリティ (Autoritäre Persönlichkeit, 1950)」形成への危惧として指摘していた。こうした文脈から、教科化に際しては「評価」という点においても、アドルノの危惧するパーソナリティをではなく、児童・生徒の道徳性そのものの発達を適切に促進する仕組みを構築する必要があることが明らかとなった。そこで本研究ではさらに、道徳教育の指導方法と評価方法の双方が有機的に関連付けられた教材の開発という喫緊の社会的課題に応答しながら、そうした危険性を単に回避するだけではない、より積極的な役割を果たすアプローチを開発し、そこに内在する形で「評価」の視点を導入し、道徳教育にキャリア教育のフレームを導入することで児童・生徒の健全な市民性の獲得に繋がる力を伸ばす可能性を切り拓くための教材とアプローチを開発し

た。

こうした問題意識とともに、本研究は教材の開発に、「価値の教授」というアプローチの限界を超え、また個人差のある「道徳性の発達」を継続的に可能にするオルタナティブ・アプローチの開発という未解決の課題に教員研修と児童・生徒指導を兼ねる教材の開発という性格を与えた。例えば、平成 25 年以降「道徳教育の充実に関する懇談会」では学校現場で「道徳の時間が形骸化している」とともに「戦後、道徳教育に関する改善の方針が出尽くして」いることが指摘されているように、これからの道徳教育の豊かな可能性の追求や「考え、議論する道徳」の実現には、他教科や他領域との接合やコラボレーションが不可欠である。かつて道徳の時間で主流であった方法のひとつは「価値の教授」であると言えるが、それ自体の必要性は認められつつも機能しにくい場面が増え、教師も子どもも共に、よりリアリティある教材を必要としていることが明らかになった。この問題への応答としては、「価値の教授」とは異なるアプローチから子どもの道徳性発達を目指す立場があり、例えばモラル・ジレンマでは、子ども個人の内に生じさせた「対立する価値」の衝突から、児童・生徒における「道徳性発達」を導出することを目指してきた。ピアジェの発生的認識論 (genetic epistemology, 1932) やコールバーグの道徳性発達論 (Stages of moral development, 1973) の捉え方に依拠したここでの「道徳性発達」に基づく方法は「道徳の時間」で使用しやすく、かつ「価値の学び」を導きやすいというメリットを持つことは事実である。他方、このアプローチは同時に継続性と個人対応性において困難が伴うという構造的な限界も持つとも言える。つまり、子どもにおける価値の衝突は常に起こり続けるわけではなく、また同じクラスに所属していてもそれぞれ異なる道徳的成長段階にある子どもの個人差に対応しにくいという限界である。こうしたことは、今後道徳教育を本来の趣旨に則り充実させていく際に解決してゆくべき課題である。

こうした限界を乗り越えるアプローチの開発という課題に、本研究は、道徳的価値の再構築と、現代的課題に対応する教授内容及び方法論の援用に加えて、教員養成・研修の可能性追求によって応答した。特に、近い将来教員として道徳教育に携わり得る者がどのような道徳意識を示すのかを浮かび上げさせ、これからの道徳教育のあり方に対する示唆を得ること、また道徳の教科化を見据え、教員養成段階における道徳教育に関わる指導方法の教育に対して示唆を得ることを実現した。この示唆は大別して二点ある。第一に、教員養成において、これから教員となる者の教員像が古典的な「聖職」としての教員像の範囲内に留まるのではなく、児童・生徒の道徳意識を高めていく方法を工夫し、実現

し続けていくような教員の資質・能力を向上させる必要があることである。第二に、学校組織においては、地域住民や大学関係者が関わる実践プログラムを定期的の実現することで、コミュニティ・スクールの実体化を推進することである。学校においては管理職や教員が定期的に人事異動があるために定まらないという側面があるため、異動の少ない地域住民や大学関係者が関わることで、その都度の状況に応じながらもプログラムの推進力を保つことができる。その軸となるのが開発した教材であり、これを共有することで、そうした推進力は維持される可能性を高めることができる。本研究の成果を通じて、道徳教育に関わる教員養成と教員研修のあり方についても一定の見通しを得ることができた。

本研究の成果として、以上の通り教科化した際の道徳教育に新たな可能性を切り拓くための基盤の一部を構築した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

中村美智太郎「Fr. シラーの美的教育思想における『遊戯』の領域--『美的主体』を手がかりとして」、『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇)』第68号(39-50頁), 2018年(査読あり)。

大瀧綾乃・中村美智太郎・藤井基貴「教員のICT活用指導力の向上に関する一考察-外国語教育におけるE-ラーニング導入の課題と可能性」、『静岡大学教育実践総合センター』第28号(58-67頁), 2018年(査読あり)。

酒井郷平・田中奈津子・中村美智太郎「内容項目に基づく『道徳意識』に関する検討-教員養成段階の大学生に対する調査」、『静岡大学教育実践総合センター』第28号(48-57頁), 2018年(査読あり)。

中村美智太郎・鎌塚優子・上野博史「道徳教育における現代的課題に対応したケース開発と実践の検討」、『静岡大学教育実践総合センター』第28号(39-47頁), 2018年(査読あり)。

中村美智太郎・藤井基貴「道徳教育における内容項目『自由』『自律』に関する基礎的研究」、『静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)』第48号(75-87頁), 2017年(査読あり)。

酒井郷平・田中奈津子・中村美智太郎「道徳教育の史的変遷と現代的課題」、『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇)』第67号(105-119頁), 2017年(査読あり)。

中村美智太郎・藤井基貴「道徳教育における内容項目『家族愛』に関する基礎的研究」、『静岡大学教育実践総合センター紀要』第24号(11-20頁), 2016年(査読あり)。

武井敦史・中村美智太郎・田中奈津子・大

瀧綾乃「学校の民間知活用促進と知的財産権保護の調整に関する開発的研究 ライフスキル教育の導入プロセスを事例として」、『日本教育大学協会研究年報』第34集(65-78頁), 2016年(査読あり)。

山崎保寿・酒井郷平・田中奈津子・中村美智太郎・島田桂吾・三ッ谷三善「アウトリーチ型キャリア教育の実践に関する研究出張講座を通じた学校と地域の連携を推進する授業実践の検証」、『静岡大学教育研究』第12号(25-37頁), 2016年(査読あり)。

[学会発表](計3件)

中村美智太郎・梅澤収・田宮縁・池田恵子・三ッ谷三善・武井敦史・ヤマモト・ルシア・エミコ・河合美保・小堀春希「静岡大学ESD・国際化ふじのくにコンソーシアムの取り組み」, 第9回ユネスコスクール全国大会/ESD研究大会(ポスター発表), 2017年。

中村美智太郎・梅澤収・田宮縁・池田恵子・三ッ谷三善・武井敦史・ヤマモト・ルシア・エミコ・河合美保・工嶋笑里「静岡大学ESD・国際化ふじのくにコンソーシアムの取り組み」, 第8回ユネスコスクール全国大会/ESD研究大会(ポスター発表), 2017年。

Ayano Otaki, Natsuko Tanaka, Atushi Takei, Michitaro Nakamura, Bridging Over School and Private Sectors: The Action Research on Intellectual Property Rights. The 10th East Asia International Symposium on Teacher Education. 1. November 2015.

[図書](計3件)

渋谷治美監訳, 中野裕考・中村美智太郎・馬場智一・大森万智子共訳, ギュンター・ペルトナー『哲学としての美学--美しいとはどういうことか』晃洋書房, 2017年, 全349頁(112-126頁, 165-174頁, 212-221頁, 人物訳注13-20頁, 参考文献一覧への邦訳増補1-12頁)。

松田純・青田安史・天野ゆかり・宮下修一編著, 相澤出・石垣康則・上藤美紀代・大塚芳子・大塚芳正・大出順・奥山恵理子・加藤尚武・上久保真理子・小島孝子・神馬幸一・高井由美子・飛永雅信・中島孝・中村美智太郎・日笠晴香・古田精一・水嶋久美子・南山浩二・諸岡了介共著『ケースで学ぶ認知症ケアの倫理と法』南山堂, 全159頁(60-64頁), 2017年。

平子友長・橋本直人・佐山圭司・鈴木宗徳・景井充編著, 筒井淳也・磯直樹・前田泰樹・大河内泰樹・村田憲郎・南孝典・菊谷和宏・杉本隆司・田中秀生・上杉敬子・小谷英生・中村美智太郎・高安啓介・白井亜希子・福島知己・荒川敏彦・佐々木隆治・阿部里加・水野邦彦・名和賢美・赤石憲昭共著『危機に対峙する思考』, 梓出版社, 全598頁(273-292頁), 2016年。

[産業財産権]

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 美智太郎 (NAKAMURA, Michitaro)
静岡大学・教育学部・准教授
研究者番号：20725189

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()